

ミュージアム・コンサート

美術と音楽～近藤嘉宏 (ピアノ)

曲目解説

ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ 第14番《月光》

弟子であり恋人でもあったイタリアの伯爵令嬢ジュリエッタ・グイッチャルディに捧げる曲として1801年に作曲。しかし、ベートーヴェンはジュリエッタとの身分の差に苦しみ、結局、この恋は成就しなかった。《月光》という通称は、ベートーヴェンの死後、1832年に詩人で音楽評論家のルートヴィヒ・レルシュタープが、第1楽章を「ルツェルン(フィアヴァルトシュテッテ)湖の月光の波に揺らぐ小舟のようだ」と評したことに由来する。第1楽章は幻想的な厳かさに満ち、第2楽章では束の間の平安が訪れるが、そこに第3楽章の荒々しい第1主題が突如現れ、聴く者を激しい情熱の奔流へと連れ去っていく。

シューマン:アラベスク

1839年の作品。タイトルの「アラベスク」(「アラビア風の」という意味)は、アラビアの建築や工芸品に用いられる唐草模様を指すが、この標題を用いたのはシューマンが最初である。付点リズムのメロディが、視覚的にも唐草模様 に似ているところから付けられたものだろう。ロンド形式で6つの部分に分かれており、ハ長調の主題の間にホ短調とイ短調のエピソードが挿入されている。最後は夢見るようなコーダで静かに曲を閉じる。

ドビュッシー:《ベルガマスク組曲》より「月の光」

《ベルガマスク組曲》は全4曲からなる組曲で、もっとも有名な「月の光」はその第3曲。「ベルガマスク」とは「ベルガモの」という意味で、若きドビュッシーがイタリア留学の際に訪れたイタリア北部のベルガモ地方に由来するとも言われている(ただし、本作でイタリア的なものが表現されているわけではない)。ドビュッシーの初期ピアノ作品であり、1890年に着手され、15年後の1905年に出版された。

ラヴェル:水の戯れ

パリ音楽院在学中の1901年に作曲。初演では酷評されたが、今日ではラヴェル独自の書法が開花した曲と評されるとともに、ピアノ音楽における印象主義の幕開けを告げた曲と位置づけられている。7の和音、9の和音を基調としたアルペジオ、不協和音により、光とともに変化する噴水の色彩が巧みに表現されている。

ショパン:舟歌

「舟歌」とは、水の都ヴェニス¹の風物詩でもあるゴンドラ乗りの歌に由来する性格小品で、ショパンの舟歌はこの 1 曲しかない。1845 年秋から翌年夏にかけて書かれ、シュトックハウゼン男爵夫人に献呈された。通常の舟歌は 8 分の 6 拍子だが、ショパンはそれを 8 分の 12 拍子にして、より息の長い旋律線を描いている。主題がめぐるロンド風の楽曲と思わせながら、緻密な構成と主題の処理がなされており、ショパンの曲のなかでも非常に難度が高い曲と言える。

リスト:悲しみのゴンドラ (第 1 稿)

1883 年 2 月 13 日、リストの 2 歳下の友人でもあり、良きライバルでもあったワーグナーがヴェネツィアで客死する。ワーグナーがまだ存命していた 1882 年、リストは 2 曲(第 1 稿と第 2 稿)の「悲しみのゴンドラ」を作曲。原曲はヴァイオリン(またはチェロ)とピアノのための作品だが、同年 12 月(ワーグナーの死の 3 カ月前)、ピアノ独奏用に編曲された。第 1 稿は、8 分の 6 拍子の舟歌のリズムに乗せて、不吉な死の予感を表すかのように(実際にリストはワーグナーの死を予感していたという)、半音階的な旋律が用いられ、暗い水面をじっと覗き込む横顔が目浮かぶようである。

ワーグナー=リスト:イゾルデの愛の死

1865 年に初演されたワーグナーの楽劇《トリスタンとイゾルデ》は、トリスタン伝説にもとづく悲恋の物語。「トリスタン和音」と呼ばれる半音階的進行が、現代音楽への扉を開いたとされる。本曲は、その第 3 幕のクライマックスに置かれた劇的なアリアをリストがピアノ用に編曲したもので、オペラの初演からわずか 2 年後の 1867 年に完成した。法悦に満ちた官能的な場面を、余すところなく再現している。